様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３４０５

研究課題名（和文）子ども虐待予防に資する「ソーシャル・キャピタル」醸成方法に関する研究

研究課題名（英文）A study of a method to strengten community enpowerment for children care

研究代表者
金子　仁子（KANEKO, Masako）

慶應義塾大学・看護学部・教授

研究者番号：４０１２５９１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、地域の子育て支援のためのソーシャルキャピタルを醸成することをめざしてコミュニテイ・ミーティング（本研究では寄り合いと称した）という手法で地区に介入しそのプロセスを記述しその意義を考察することである。
　A地区において、ニーズ基盤調査やニーズ把握のインタビューを行い、寄り合いの準備会を行った後、住民・行政職員・大学とで協力して寄り合いを行った。その結果、参加者は子育て中の人々には交流の場が必要と認識し、寄り合い後に子育て広場が住民によって開設するに至った。寄り合いを通して人間関係も深まり、子育て支援に関与したいという人も出現したことからソーシャルキャピタル醸成に寄与したと考えた。

研究成果の概要（英文）：PURPOSE&METHOD: During community meetings (CM) in a district, inhabitants discussed the problems they have and share solutions to the problems. One significant problem dealt with childcare. The question arises, what can community health nurses do to empower local communities and find solutions to local problems, thus helping social capital grow. We performed an intervention study in District A (population about 3400) using participant-observation methods. We made detailed records of CM.
RESULTS&CONCLUSIONS: Researchers discovered that in the CM, participants talked about the problems of the district, specifically that there were no places where children could play. In response, researchers, in cooperation with local authorities, intervened to make a place for new and established residents with children to meet and play. CM observation, if used sensitively, can help community residents find local solutions to local problems and at the same time lead to increased community empowerment.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：ソーシャル・キャピタル　子育て　保健師　コミュニティ・ミーティング　主任児童委員　自治会　コミュニテイ・エンパワメント

１．研究開始当初の背景

ソーシャル・キャピタルをパットナムは「人々の協調活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特徴」1)と定義した。同じくパットナムによる「孤独なボーリング」が出版された後に我が国でも内閣府および内閣府経済総合研究所によりこの「ソーシャル・キャピタル」（ＳＣと以後省略）をキー概念とした調査 2)が行われ、ＳＣは個人の信頼・ネットワーク・社会活動（ＳＣを形成）が向上し、コミュニテイ評価が向上することによって生活の安心感（家族、老後、子育て、就職等）につながるとした。したがって、ある地区において、その地区内に住む人々中にＳＣが醸成されることによって、同じ規範に基づき人々はネットワークを築き信頼関係が深まるため、虐待を予防するためのシステムをつくりやすい環境が整うと考えられる。

保健師の活動について「保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会報告書」3)中では「みる」、「つなぐ」、「動かす」はそれぞれが単独で機能するのではなく、「つながりながら見る」、「つなげて動かし新たな地域実態をみる」など「つなぐ」を活動的なコアとし保健師は、地域の住民同士または、関係機関をつないでシステムづくりの役割を果たしていることが明らかとなった。

日本看護協会の先駆的保健活動交流推進事業ではカナダから「コミュニテイ・ミーテイング」という手法 4)が紹介され、いくつかの地域で実践され報告されている。この「コミュニテイ・ミーテイング」（今後はCMと略す）という手法は、住民ニーズや地域の健康課題を明らかにし、生活実感を大切にしながら地区集会を行う中で行政と住民、地区住民同士のパートナーシップを築き、課題解決を行うための計画案を作成し、施策化していくプロセスである。したがって、このCMという手法はＳＣという視点からみれば、先に述べた内閣府経済社会総合研究所の調査でＳＣを醸成するためのコミュニテイ機能再生活動プロセスで示されたＰＬＡＮの段階のニーズ認識を「多様な主体」の参加によって行う機会となっていると考えられる。

２．研究の目的

本研究では、ある一つのコミュニテイ内（A地区内）で子育てについての健康ニーズを明確にして、住民同士や行政と住民とのネットワーク強化をはかる「コミュニテイ・ミーテイング」すなわち地区集会による介入を行うことで、ＳＣを醸成し、子育て支援のシステムをより有効なものとし、虐待予防に資する可能性について、そのプロセスおよび、その地区内の変化を記述し評価を行うことで明らかにしたい。特に、本研究では、CMにあたり住民との協働活動を推進するための準備状況を整えていくプロセスを丹念に記述することで、保健師の「つなぐ」や「動く」機能について明らかにする。

本研究ではコミュニテイ・ミーテイングを寄り合いと称した。

３．研究の方法

１）介入地区内の健康ニーズを明らかにする。

① インタビュー：A地区を担当する地区内子育て関係役員・A地区の隣の地区保育所の保育士、A地区担当保健師。A地区の親子の印象などを語ってもらった。

② 地区踏査：地域内の状況について観察する。

③ 地区の一部への基盤ニーズ調査：ＳＣの状況や子育てについて調査を実施する。

２）寄り合い準備会：　寄り合いに先立ち、焦点をしぼるために準備会を行い、寄り合いのテーマを決める。

３）地区内に活動状況を周知するための新聞を発行する。

４）寄り合いの実施：住民および行政職員が参加者となりCMの手法による寄り合いを実施(4回)。

５）インタビューの実施：寄り合いの直後と１年後に寄り合いについてや、寄り合いの後の地域の変化についてインタビューを行った。

４．研究成果

A地区の状況は以下に示すとおりである。
A地区の概況：JR の駅から 1 キロ圏内。
住宅地であるが商店もある市街地。
人口 3300 人（老齢人口割合 29%）、
（市人口 20 万弱）
世帯数 1431（単独世帯 33%）。
A地区年間出生数 25 程度。
8 地区の自治会が１つの連合自治会を形成。
地区内に１小学校。
町内の活動は小学校や各自治会の区公民館で行われる。
地区内に幼稚園が１つ。保育所は地区内にはなく、地区中心部から７'～８分のところに保育所がある
保健センターの保健師 1 人が地区を担当。

A地区への介入の経緯は以下に示すとおりである。
表１　A地区への介入経緯

年度	事項	新聞発行
2011	行政への・説明と協力依頼 連合自治会等の説明 住民・関係者インタビューの実施 講演会実施	1 号:子育て応援団」特集
2012	寄り合い準備会（2 回） 地区ニーズ基盤調査 絆ワークショップ	2 号:子育てと地域の役割 3 号:地域の活力
2013	寄り合い（4 回） 寄り合い事後インタビュー	4 号：ｺﾐｭﾆﾃｨ・ﾐｰﾃｨﾝｸﾞってなに？ 5 号:知ることから始まる絆づくり 6 号：協う
2014	・寄り合い 1 年後ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ ・地区での活動支援「おひさま広場での演劇の実施」 ・研究成果報告会	7 号:はじめのいっぽ 8 号：育つ 9 号:一人で頑張るをみんなで持ち寄る

（1）ニーズ調査
①インタビュー結果
インタビューは主任児童委員 2 人、保健師 2 人、近隣保育所保育士 2 人に行った。結果の概要は以下であった。

○住民（地区子育て関係役員）
・新玉は地区としては子どものことでは落ち着いている。
・いままでは見守り対象の家は 1 件のみ。
・不登校についても聞いたことがない。
・祖父母が子どもをみていると言う家も多い感じがする。
○近隣の保育所保育士
・A地区とは限らないがさまざまな親子（十分ケアが行き届かない子も含め）がいる。
・三世代同居の家でも親世代の子育てを祖父母世代が支援する光景をみることは少ないと感じる。
○保健センター保健師
子育て中の人で支援している多くは転入者で、近隣との交流が少なく孤立している状況である。
②　地区ニーズ基盤調査
ＳＣに関与する実態、住民の信頼関係、近隣同士のつきあい、地域活動への参加および、子育て・子育て支援への認識を調べた。配布は手渡しで、回収は郵送で行った。
290世帯に配布し、回収できたのは77通（回収率（26.5%）、無記入が多かった3通を除き有効回答74通を分析対象とした。
回答は性別では男19(25.7%)、女52（70.3%）、不明3（4.1%）となった。年齢別では40歳以下18(24.3%)、50歳代9(12.2%)、60歳代19(25.7%)、70歳以上28（37.8%）となった。地域内の役割では何らかの役割有り47(63.5%)役割無し27(36.5%)となり、役割の内容は、自治会役員22（29.7%）、その他地域内の役割25（33.8%）となった。
地域内の信頼関係は、信頼できる29（40.8%）、中間37（50.0%）、信頼できない3(4.0%)、わからない2（2.7%）、不明3（4.1%）となった。
地域内のつきあい程度は、日常品の貸し借り15(20.3%)、立ち話40(54.1%)、挨拶程度17(23.0%)、全くしない1(1.4%)、不明1(1.4%)となった。
子育てについて気になることでは、調査対象の市の子どもの育ちが気になる 23(31.1%)、子どもを育てている親について気になる 26(35.1%)、子育て環境が気になる 22（29.7%）となった。

（2）寄り合い準備会

寄り合いを実施するに当たり、地域内に寄り合いについての関心を高め、また子育ての課題についての焦点をしぼるために寄り合い準備会を2012年12月に地区内の公民館で2回おこなった。参加者は住民5名、行政等関係者6名で、大学関係者も加わり、司会は大学教員が行った。

1回目は子育てについての各自の思いを語ってもらった。内容は、「子育て世代の人たち、また高齢者も含めた交流する場が少ない」や、相談窓口に相談に来ない人がいることから「人との関わりに積極的でない人々の存在」、 地区の課題は、「子ども会の加入率が低下している」、「子どもの遊び場所が少ない」ことであった。地域の強みとしては、「子どもの登下校時に子どもに積極的に声をかける人がいる」と言うことが上がった。

2回目では、小学校での芝育成、ウォークラリー、フェステイバルの実施状況が話された。転入者がなかなかなじめないが、現状では子ども会で親子のつながりができていくのではないかということであった。転入者との関係は「なかなか気心がしれた関係までいかない」と話され、これらから地域の中に親同士、子ども同士、地域の人と親や子とのつながりをつくること必要ではないかと話し合われ、寄り合いのテーマは「子育てを通して、気心の知れた地域のつながりをつくろう」となった。

（3）新聞発行

活動の状況を地区の多くの周知するために新聞を発行した。企画・編集は学生に任せ、2013年度までの3年間は6人で、後5人が活動にあたった。新聞の名称は「あらたまっ子ニュース」とした。創刊号は 400部、2号は600部、3号以降は1100部発行した。記事特集の内容は表2に示した。

（4）寄り合い実施

寄り合いを4回実施した。寄り合いでは、参加者の生活実感を大切にすること、参加者同士は平等でありパートナーシップで行うこと、対立でなく対話、未来志向でおこなうこと、またこの寄り合いの活動の意図としては、子育て支援のためのお互い様の精神に基づく絆をつくること、地区内の子育て支援の輪が広がること、地区内の子育て問題について課題解決の手立てが講じられることということを各回で説明した。

4回をステップ１・２・３・４とし、各回の目標は、ステップ1は現状認識の共有、ステップ 2は課題の整理、優先的に検討する課題の検討、ステップ3は具体策の検討、ステップ4は具体策の実施に向けての話し合いとした。

CM参加者は住民および行政の合意のもと選出した住民および関係機関関連者20名，行政職員4名で、これに大学関係者である．大学関係者を除く1回以上の参加者は16名であった。このうち3回以上の参加者は8名であった。この方々に対して終了直後のインタビューを実施した。

寄り合いの話し合いでは、内容が可視可できるように、発言を付箋紙に記入してもらうことや、話し合いの記録をプロジェクターで映し出すことを行った。また、各回の話し合いの内容はまとめを作成し、次の寄り合いで配布して振り返りをおこなった。

ステップ１：現状認識の共有として、参加者が感じる子育て・つながりについて気になることを出し合った。出された内容は、「小さな子の遊び場が少ない。」「核家族で子育てしている人では家族以外のサポートが必要」「うちと外の違い（地域内の知り合いは強い絆、転入者は祭りにも参加しづらい）」地域の強みとしては、「世代を超えた交流の場がある、」「子ども会の加入率が100%近く」「子どもをも守る人たちの存在」であった。

ステップ２：ステップ1で出された課題を整理して、図に示すように、交流の場をつくろうということになった。

ステップ３：人々が交流する場の具体策について、いつ、どこで、誰が、誰のために、どのようにしたらよいかを具体的に話し合った。

いつ：未就学児だったら昼間、学童だったら夜。

どこで：公民館を拠点に、芋掘り等は小学校の畑を使用できないか。

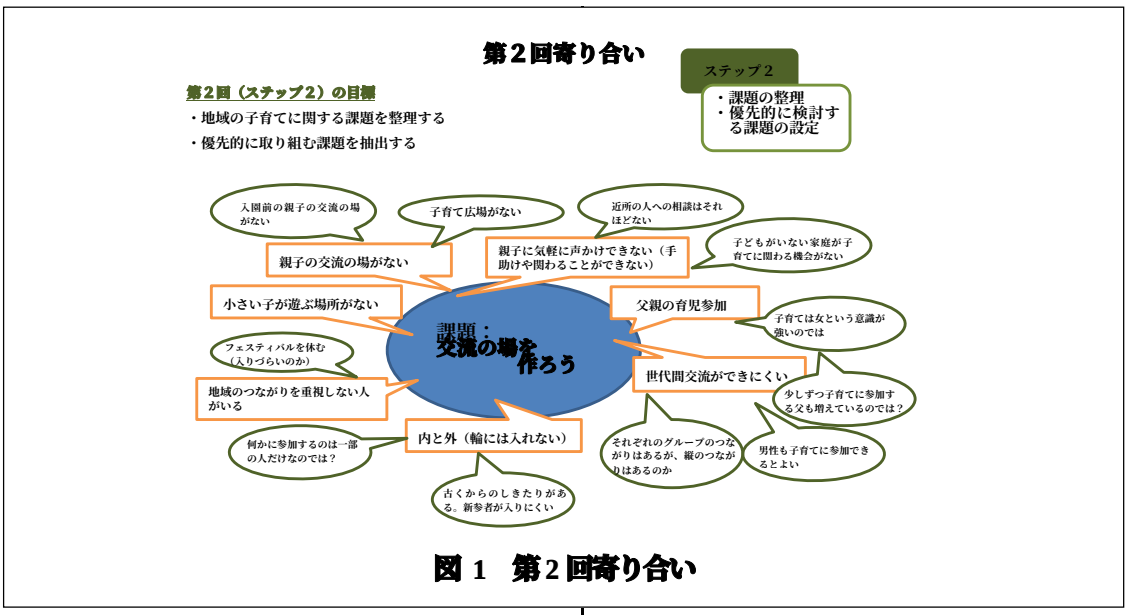

図 1　第 2 回寄り合い

誰が：主任児童委員、民生委員が中心で、地域の他の人が協力していく、男性、高齢者も参加するとよい。
誰のために：未就学児と親、それに高齢者も加わるとよい。時には学童も。
どのように：未就学児とママ、高齢者が集まる場。
高齢者の方の力をかりて「サロン」のような形
・高齢者の力をかりて、年間行事を一緒に企画
・自治会や社協が中心となり、色々な人材を募って行ったらよいのではないか。
○学童と高齢者の交流・学童クラブに高齢者等のいろいろな人が係わることで交流の場にすることができないか。

ステップ４：具体策の実施に向けての話し合い

・子育て広場の立ち上げを真剣に考え始めた。子育て広場を立ち上げて、徐々に高齢者の方に参加してもらったり、人を集めたりと考えている。できる範囲のことを始めてから広げていきたい。
・子どもが多い地区ではないので最初は少人数でもよい。
・年間を通じておこないたい。
・予算などはどうする？

寄り合いの終了 4 ヶ月後に主任児童委員・民生委員・健康普及員による子育て広場が地区公民館を会場にして月 1 回実施されるようになった。1 回の参加者は 15 組から 22 組である。
また、防災活動している人たちの中に、子どもの登下校時に同じに場所に立って見守っている方がおられるようになった。

⑸実施後インタビュー

①　直後のインタビュー

3 回以上の出席者 8 名に対して、寄り合いで知ったこと、寄り合いをやってよかったこと、絆の深まる可能性について尋ねた。

寄り合いで知ったことは、「子どもをもつ母親の交流の場の必要性」「A地区は閉鎖的・保守的な面がある」「話し合いによって溶け込むことができた」「地域の中には子どもを見守っている人がいる」寄り合いがよかったこと、「新たなことをやっていこうという機運が生まれた」「私も何かやっていこうという気持ちになった」「地域の人の考えがわかった」となった。絆の生まれる可能性については、「話し合いから生まれる」、「方向決定から生まれる」、「協力の輪が広がる」となった。

②1 年後インタビュー

1 年後インタビューを、地区のリーダー、子育て中の方、行政職員の方に行った。

地区のリーダーの方は、寄り合いをやってよかった。今後の防災のための名簿作りなどでも地区でよく話し合って実施することが大切と思う。
参加者の方は、いままで子育ての世代の人が発言しても、「若い人が何言ってんのよ」という感じがあったが、今回の寄り合いでは、みんなの意見を聞きましょうということで、意見が言えた。寄り合いを行ったことについては、地域の一体感がうまれ、「皆同じ立場で一緒にやろう」という雰囲気

が生まれ、「子育て広場に参加することで地域の人同士の関係性が深まったと感じる」であった。
考察：ニーズ基盤調査結果より、A地区は内閣府の調査に比し、地区内の信頼関係が強く、日常的なつきあいでは物の貸し借り、相談の割合も高く地域のつながりは強い地域であると考えられる。

ニーズ把握のインタビューで、保健師や保育士は孤立した子育てやネグレクトを疑うようなケースが気になるとしていたが、地区の住民はそのことに気がついていない状況であった。寄り合いの話し合いで、子育て中の親の交流の場が必要と認識されたことが、実際の子育て広場の設立につながったと考えられる。CMで重視している生活の実感からの発言を大切にすることやパートナーシップにより、発言を遠慮してしまう若い世代がCMの中では自分たちの実感を発言できたことが、ニーズの顕在化に役立ったと考える。CMによって地域の住民による問題解決に至ったことからコミュニテイ・エンパワメントもなされたと考える。

また、寄り合いと寄り合いから発した子育て広場を通して、地区内の人々の関係性が強まり、協力して何かを行っていこうとする機運が高まったと考えられる。また事後インタビューでは、今何かできなくても時が来たら自分の何かの役に立ちたいと発言が見られた。これらのことから考えると、CMによっては絆が強まった、すなわちソーシャルキャピタルの醸成に功を奏したと考える。

引用文献

１）ロバート　D.パットナム、「哲学する民主主義」、ＮＴＴ出版、2001.
２）内閣府「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環 を求めて」、2003.
３）保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会「保健師のベストプラクティスの明確化とその推進方策に関する検討会報告書」日本公衆衛生協会、2008.
4) 日本看護協会、平成 11 年度先駆的保健活動交流促進事業「コミュいテイ・ミーテイングガイド」日本看護協会出版会、2000.

５．主な発表論文等
〔学会発表〕（計３件）

１）発表者名：金子仁子、標美奈子、佐藤美樹、三輪眞知子、
発表演題名：子育て支援のためのソーシャルキャピタル情勢に関する基礎調査
学会名：日本公衆衛生看護学会第２回学術集会
発表年月日　2014 年 1 月 13 日
発表場所：国際医療福祉大学小田原保健医療学部

（２）発表者名：金子仁子、佐藤美樹、標美奈子、三輪眞知子、
発表表題：子育て支援のためのソーシャルキャピタル醸成に関する研究　A 地区におけるコミュニティミーティングを通して
・学会名：第３回日本公衆衛生看護学会学術集会
発表年月日：2015 年 1 月 11 日
・発表場所：神戸国際会議場（兵庫県神戸市）

（３）発表者名：Masako Kaneko、Miki Sato, Minako Shimegi.、Machiko Miwa
・発表表題：A study of a method to strengthen community empowerment for children care
・学会名：The 6th International Conference on Community Health Nursing Research
・発表予定年月日：2015 年 8 月 20 日
・発表場所： Seoul National University (Seoul, South Korea)

６．研究組織
(1)研究代表者：金子　仁子（KANEKO　Masako）
慶應義塾大学　看護医療学部　教授
研究者番号：４０１２５９１９
(2)研究分担者：三輪　眞知子（MIWA　Machiko）
梅花女子大学　看護学部　教授
研究者番号：１０３２０９９６
(3)連携研究者：標　美奈子（SHIMEGI Minako）
慶應義塾大学　看護医療学部　准教授
研究者番号：３０２８９９９６
・佐藤　美樹(SATO Miki)
慶應義塾大学　看護医療学部　助教
研究者番号：９０７４９５４０
(4)研究協力者
・ 速水　裕子（HAYAMI Yuko）： 甲南女子大学看護リハビリテーション学部助教
・林　友紗(HAYASHI Tomosa)： 東邦大学医学部社会医学講座　衛生学分野　博士課程
・ 石川　英里(ISHIKAWA Eri)：　慶應義塾大学看護医療学部　助教
<慶應義塾大学看護医療学部　学生チーム>
大槻　弥生(OTSUKI Yayoi)、鈴木　江利子(SUZUKI Eriko)、クーパー　世利菜(KOOPER Serina)
岡部　卓也(OKABE Takuya)、佐藤　礼美(SATO Remi)、松永　結花(MATSUNAGA Yuka)
千釜　百合香(CHIGAMA Yurika)、福田　悠希(FUKUDA Yuki)、